

進める目的でさまざまな討論がなされている。しかし、中西竜也氏の作品は中華とイスラームが相互理解を進めるためのものとは思えない。第7章の「スーフイズムとタオイイズム」は井筒俊彦の“Sufism and Taoism”を思い浮かべてしまう命名であるが、井筒の場合は思索と認識の構造が究極的には同一の形式をとるということを証明して対話の可能性を確立した著作である。それに対して、第7章「スーフイズムとタオイイズム」はスーフイズム文献と道教文献に見える語彙のパラレリズムを分析しただけのものである。さらに研究を進めてもらいたい主題のひとつである。

ともかく中西竜也の研究は広大な中国大陸の奥地に点在するイスラーム教徒の共同体の中で、かろうじて命脈を保っているスーフイ的イスラーム文化をピックアップして念入りに分析したものである。その意味では労作であると評価できる。しかしながらこの作品のなかで取り上げられた諸主題が、おおきなパースペクティブで捉えられた中国イスラームのなかでどのように位置づけられるのかが今一つ見えてこない。著者の今後の研究に大いに期待したい。

(松本 耿郎 聖トマス大学人間文化共生学部教授)

---

#### 山尾大『紛争と国家建設——戦後イラクの再建をめぐるポリティクス』明石書店 2013年 298頁

2003年の米軍による侵攻作戦以降、イラクはめまぐるしく変化してきた。反米闘争からシーア派イスラーム主義勢力の伸張へ、内戦状態から国民統合の主張へと政治情勢は揺れ動き、世界的にきわめて注目された武力紛争経験国でありながら、戦後イラクの政治過程は専門家以外にはなかなか理解しづらい。こうした状況の中、本書の刊行は大きな意義を持っている。米軍による侵攻直後から完全撤退後の2012年までを視野に入れ、戦争によってサッダーム・フセイン体制が破壊された後にどのような政治体制が立ち現れたのかを、一次資料を駆使しつつ、きわめて詳細かつ説得的に描き出した本書は、イラク研究の水準を引き上げるだけでなく、他地域・他分野を専門とする研究者との対話を促し、研究の裾野を広げるであろう。

本書の優れた点は、政治過程の分析でありながら、これを単にクロノロジカルに描くのではなく、「国家建設」の観点から多面的な分析を加えていることである。政治学の基本概念を用いて、紛争後の政治過程を民主化(第二章)、政党政治(第三章)、選挙(第四章)、治安機構の確立(第五章)、財政(第六章)というトピックに整理し、それぞれ詳細な議論が進められている。分析に関して特に評価したいのは、イラクの国内アクターに注目し、彼らがいかに主体的に行動し、自己の利益を政治秩序に反映させていったのかという視角が本書全体を貫いている点である。この視角を共有することで、読者は戦後イラクの政治過程を諸アクターの合理的な行動の結果として理解できる。それは、本書の記述をきわめて明快にしている。

評者はアフリカ政治研究を専門としており、戦後イラクの政治過程について本書の分析から多くを学ばせてもらった。こうした良質の現状分析は地域研究の存在意義を明確に示すものである。本書に対して、多くの賛辞が寄せられることだろう。ここではこれ以上賞賛を重ねることはせず、むしろ評者が感じた疑問を述べておきたい。それが優れた研究書に接したときの、書評者の責務だと考えるからである。

明快な本書の分析を読みつつ評者が抱いた疑問は二つに集約される。第一に、国家建設の評価に関わる点である。結論部分で筆者は、戦後イラクの国家建設を否定的に評価し、戦後イラクに外部

アクターが持ち込んだ制度を内部アクターがもっぱら自らの利益のために利用して政治対立が進んだ結果、国家機構の建設が進まず、「国家建設が進展しなかった」(p. 253)と述べている。ここで国家建設とは何を指すのだろうか。筆者の説明によれば、従来の国家建設をめぐる研究の論点として、1) 治安機構の再建、2) ガバナンスと正統性の強化、3) 和解を通じた国民形成、4) 民主主義の定着、が挙げられている (pp. 14-16)。本書を読む限り、戦後イラクがこれら四つの側面のすべてにおいて失敗してきたとは考えにくい。内部アクターは民主的制度を前提とした政治行動を取っており、その意味で少なくとも民主主義の定着に関して積極的な評価が可能であろう。筆者は終章において、「民主化」が「国家機構の再建を阻害する要因にすらなる」(p. 254)可能性を指摘しているが、筆者が否定的評価を下しているのは、国家建設全般というより国家機構とくに治安機構の再建という側面だと思われる。

国家建設にはもとより多様な定義づけが可能である。例えば OECD-DAC は平和構築の中核に国家建設を据えているが、国家と社会との関係のあり方に焦点を当ててこの概念を捉えている。政策的には、社会に対する国家のサービス提供能力と社会から見た国家の正当性 (legitimacy) をともに向上させることが目標とされる (OECD 2007)。先の四つの論点に即して考えれば、治安機構の再建やガバナンスは国家のサービス提供能力に関わり、国民形成や民主主義の定着は社会から見た国家の正当性に関わる問題ということになる。OECD-DAC の概念化が全てではもちろんないが、国家建設が国家機構の確立のみならず、国家の正当性に関わるという認識は妥当だと評者は思う。戦後イラクは国家のサービス提供能力向上には成功していないようだが、国民による国家の正当性の捉え方にポジティブな変化はないのだろうか。筆者の評価を聞きたいところである。

二つめの疑問は、内部アクターの行動に対する評価に関わる。やはり終章で筆者は、イラクの内部アクターが、「米国という外部アクターが導入した政治制度を換骨奪胎し、自らの利害関係を最大化するための手段として再編」したと述べる (p. 252)。この主張について評者も基本的に賛同するが、米国の意図とイラク内部アクターの意図とのギャップを強調するあまり、あるべき政治制度と現実のそれとがあたかも全くの別ものであり、また後者がイラク特有の現象であるかのような記述が気に掛かる。小政党の合従連衡や、筆者が「二重の競合的パトロン・クライアント構造」と呼ぶ利権配分の調整制度は、「イラク独自の仕組み」として挙げられているものの、かなりの程度普遍的な現象ではないかと思うからである。

小政党の乱立と政党間の合従連衡は、明らかに選挙制度の結果であろう。比例代表制を導入した時点で、こうした状況はかなりの程度予測できたはずである。筆者が多極共存型民主主義のあるべき姿として示す「協力や協調」(p. 128)は、消極的な妥協や無節操な合従連衡とコインの裏表である。実際、1990年代の日本でも、政治権力を掌握するために諸政党が合従連衡を繰り返した。比例代表制が小党分立の政党システムを生み出した時、こうした現象は普遍的に生じると考えるべきだろう。「二重の競合的パトロン・クライアント構造」も、イラク独自というよりは、分権的な民主主義体制の下で広く観察される現象ではないだろうか。中央政府が石油収入という資源を握っており、かつその権限がそれほど強くない状況の下では、地方政府が自らの配分される資源の拡大を狙って、中央政府そして他の地方政府に対して様々な駆け引きを繰り返すのはすぐれて合理的な行動だと思う。

本書の素晴らしさの一つは、政治学の概念を用いて、複雑なイラクの政治過程を評者のような素人にもわかりやすく伝えたことにある。そこで説明されたイラク政治を動かすメカニズムのすべてを、「イラク独自のもの」として囲い込んでしまうのはもったいない。どのような条件がいかなる

政治行動を促し、結果としてどんな現象を引き起こすのか、なるべく普遍的な言葉で考える方がよいのではないだろうか。それは他の研究者との対話を促し、イラクの独自性もそのなかではじめて見えてくるように思う。

OECD 2007, "Principles for Good International Engagement in Fragile States & Situations," Paris.

(武内 進一 ジェトロ・アジア経済研究所アフリカ研究グループ長)

## 堀池信夫『中国イスラーム哲学の形成——王岱輿研究』人文書院 2012年 582頁

### 1.

本書は、中国においてイスラーム思想が中国伝統思想と対決ないし調和するなかから、「中国イスラーム哲学」がいかにして熟成されたかを明らかにしようとする。主には、17世紀の半ばに活躍した中国ムスリム学者、王岱輿の漢語著述を深く詳細に検討することにより、中国イスラーム哲学形成の具体相に迫る。また、王岱輿の前後の時代に活躍した中国ムスリム知識人たちの漢語著述にも分析を加え、中国イスラーム哲学の萌芽、展開、紆余曲折を俯瞰することをも試みる。

中国イスラーム思想をめぐる研究は、近年、進展いちじるしい。とくに、中国イスラーム思想史上のひとつの頂点をなす、劉智(1724年以降没)の思想をめぐるのは、質・量ともにある程度充実した成果が生み出されている<sup>1)</sup>。いっぽうで、劉智の先駆者であり、中国ではじめて本格的にイスラーム思想を語った人物と目される王岱輿の思想についても、比較的多くの研究がある<sup>2)</sup>。が、こちらは劉智研究に比べると、まだまだ深まりが足りない嫌いがある。

このような研究状況の中であって、本書は、いわば中国イスラーム思想研究の本流に掉さし、その要というべき王岱輿思想研究に新展開をもたらした。本書の価値は、第一にこの点にこそ存する。

第二に、王岱輿以前のイスラーム思想の状況を果敢に探求したことも、本書のとくに評価すべき点である。中国ムスリムによるイスラームについての本格的な思索は、王岱輿を嚆矢として花開いた、と一般には考えられている。そのため、それ以前の中国ムスリムの思想活動について論究する研究は、これまでほとんどなかった<sup>3)</sup>。本書は、こうした研究状況の改善に貢献したのである。

1) 代表的なものに次のようなものがある。佐藤実・仁子寿晴 編、回儒の著作研究会 訳注『訳注 天方性理 卷一』、文部科学省科学研究費補助金学術創成研究 イスラーム地域研究第5班「イスラームの歴史と文化」、2002年；青木隆・佐藤実・仁子寿晴 編「訳注 天方性理 卷四」中国イスラーム思想研究会編輯『中国イスラーム思想研究』1(2005)、9-217頁；青木隆・佐藤実・中西竜也・仁子寿晴 編「訳注 天方性理 卷二 その一」中国イスラーム思想研究会編輯『中国イスラーム思想研究』2(2006)、55-203頁；青木隆・佐藤実・中西竜也・仁子寿晴 編「訳注 天方性理 卷二 その二」中国イスラーム思想研究会編輯『中国イスラーム思想研究』3(2007)、83-397頁；佐藤実『劉智の自然学——中国イスラーム思想研究序説』汲古書院、2008年；仁子寿晴「中国思想とイスラーム思想の境界線——劉智の「有」論」堀池信夫編『アジア遊学 129 中国のイスラーム思想と文化』勉誠出版、2009年、61-79頁；Sachiko Murata, William C. Chittick, and Tu Weiming (with a Foreword by Seyyed Hossein Nasr), *The Sage Learning of Liu Zhi: Islamic Thought in Confucian Terms*, Cambridge and London: the Harvard University Asia Center for the Harvard-Yenching Institute, 2009. また、中西竜也『中華と対話するイスラーム——17-19世紀中国ムスリムの思想的営為』(京都大学学術出版会、2013年、77-101頁)の第2章「イスラームの「漢訳」における中国伝統思想の浸潤——劉智の「性」の朱子学的側面」も劉智思想を問題にしている。

2) 代表的なものに次のようなものがある。Sachiko Murata, *Chinese Gleams of Sufi Light: Wang Tai-yu's Great Learning of the Pure and Real and Liu Chih's Displaying the Concealment of the Real Realm* (with a New Translation of Jami's *Lawa'ih* from the Persian by William C. Chittick), Albany (New York): State University of New York Press, 2000. 金久久『王岱輿思想研究』北京：民族出版社、2008年。

3) ただし、王岱輿以前のイスラーム思想の状況を探ろうとする研究も、わずかながら存在する。たとえば、冯今源「《来复铭》析」(青海省宗教局 編『中国伊斯兰教研究——西北五省(区)伊斯兰学术讨论会(西宁会议)论文选